

中島棕隠の『鴨東四時雜詠（鴨東竹枝）』をめぐる一考察

—— 日本的教養の一側面として ——

一、中島棕隠と『鴨東竹枝』

江戸時代後期に活躍した漢詩人に、中島棕隠がいる。その生前に刊行されたものは総べて六種十七冊にものぼり、日本近世の漢詩人の中で最も著作の多い詩人であるのみならず、その他の戯作や狂詩の類も含めて、多彩な才能を発揮した人物でもある。

その本業は儒者であるが、幼時から奇才があり、詩と書に秀でる一方、和歌や狂詩にも才能を現わし、戯作や俗曲の方面でもその名を知られた人である。

彼は安永八年（一七七九）に、京都の代々儒学を業とした家に生まれた。その没年は安政二年（一八五五）。享年は七十七才であった。父は儒学者の中島泰志（徳方）である。

名は規（まどか）だが、徳規（よしのり）が正式名と云われている。父の名の一字をうけるからである。字は景寛が知られて居るが、また土成とも名のつたらしい。通称は文吉。号は棕隠であるが、他に棕軒、棕隠軒とも云った。彼は始めは雲亭と号したが、早い時期

綿 本 誠

に棕軒と改め、後には専ら棕隠を以て号としたようである。棕隠の名の由来は、彼が自ら「櫻癖」と自嘲したことにも見られるように、櫻（俗に棕に作る）欄（二字でシュロ）の木の、「健緑亭々の色、勁直高疎なる品格」を愛した所から、その名を得たようである。

即ち、あざやかな、そして亭々としげる緑と、すっきりと直立し、余分な枝を持たぬ品格と風情を愛した結果であろう。

その人となりは唐六如（明の唐寅。江南第一の風流才子と自称）の風があり、放縦であった。その著述の巻頭には、よく「平安後学好事儒者臨棕軒」と署したように、自らを「好事儒者」と称して居る。その風流多才ぶりは、狂詩の作者としての安穴道人の他に、畫餅居士、因果道士の名による多数の作品にうかがうことが出来る。

棕隠の代表的詩集であり、風流人としての彼の名を不朽にしたのが、通称『鴨東竹枝』の名で知られる『鴨東四時雜詠』である。

同書は、今その伝本として、四種のものが知られて居る。その大

概を見てみると、先ず始めに二十首よりなる『鴨東雜詠』があり、次いで六十五首に増補された『鴨東四時詞』があり、更に百首よりなる『鴨東四時雜詠百首』本があるが、現在流布して居るものとして知られて居るのが、百二十首に増補された上に、作者の自注を付した、『鴨東四時雜詠』本である。

先程通称として挙げた『鴨東竹枝』なる名の標記は、いずれの書にも見られないが、六十五首本の『鴨東四時詞』の頃から、その内容が竹枝体より成る所により、巷間に云われ始めたものと考えられて居る。しかしそれは明らかに正式名称ではないと考えてよいであろう。通称とした所以である。

ここで竹枝なるものについて、今更目新しい事でもないが、一応の解説をしておこう。

一般に樂府の一体であつて、男女の情事や、土地の風俗などを詠じたものと理解されて居る。その始まりは、唐の劉禹錫が、朗州に謫された時に、新詩九首を詠じたことであるとされて居る。

史書の『唐書』の劉禹錫伝には次のようにある。

「禹錫連州の刺史に貶せられ、未だ至らざるに朗州の司馬に斥けらる。州は夜郎の諸夷に接し、風俗の陋なること甚し。家ごとに巫鬼を喜び、毎に竹枝を歌う。鼓吹悲回し、其の聲は愴憊なり。禹錫謂へらく、屈原は阮湘の間に居りて九歌を作り、楚人をして以て神を送迎せしむ、と。乃ち其の聲に倚りて竹枝辭十餘篇を作る。是に於て武陵の夷俚は悉く之を歌へり。」

即ち左遷された任地で、その地の俚歌の鄙陋なのを悲しみ、屈原

の聲にならつて、神をもてなすために作ったものであるとされている。

このような由来によるためであらうか、唐代には専ら巴蜀の風景を詠じて居ることは、樂府詩集の八十一に見られる通りである。しかし宋の蘇東坡以後は、ただその地の風土を詠ずるようになった。元代に至り、楊鉄崖の西湖竹枝によって研麗を極め、世に艶称されるに及んで、その後は情詩と見られるようになったと云えるようである。

我が国でも、近世に及んで多くの人によって作られるようになったが、その代表的なものに、頼山陽の『馬関及び崎陽竹枝』や、菊池五山の『深川竹枝』などがある。もつとも前者は風物描写に力点を置くように思われるが、後者は燈紅酒緑の盛を敘し、やや淫猥に属すとの批評がある。竹枝体にはこの二つの流れがあることは、注意しておきたい。

我が国における竹枝体の流行は、すでに宝暦年間に、祇園南海の『江南詞』を最初として、市河寛斎『北里歌』、先述の菊池五山の『水東竹枝（所謂『深川竹枝』）』、柏木如亭『吉原詞』と相次いで現われ、寛政ごろから大いに流行したものである。

棕隠の作もこのような流れの中で登場する訳であるが、友人の梅辻春樵の『対鷗閑処集』下に納められて居る、『鴨東四時詞』春樵山人序によれば、五山の『水東竹枝』三十首と同じころに成つたとある。同書はその奥書に、「丁巳の歳、余水東に僑居す。長夏無事なれば、戯れに此の詩を作る」とある所から、寛政九年、五山二十

六才の作と考えられている。春樵の序によれば、そのころに棕隠の『鴨東竹枝』の第一首が成ったとあるが、実に棕隠十九才の時の作であることになる。このことは、また実に信ずるに足ることでもある。

彼はすでに、師の村瀬栲亭³の華陽社中にあった十五、六才の頃から文名を現わした。即ち、十五才（寛政五年）の作の『旗亭春雨』（七絶四首により成る）や、十六才（寛政六年）の體歌（七言古詩長篇）等によって、その才能を知られていたようであるが、更に十八、九才の頃、六如上人と出会った事により、詩人への道を歩む決意を固めるに至るのである。そして、まさにその十九才（寛政九年）に、『鴨東竹枝』の第一作が成って居るのである。

しかし彼の竹枝詞には、六如よりも、むしろ師の栲亭の影響が強いと考えられて居る。栲亭は六如とともに、宋詩鼓吹の大先達とされて居るが、竹枝詞についても、既に時流に先行して関心を示し、文化四年刊の『栲亭二稿』には、『浪速雜詞』（四首）と、『鴨東四時歌』（四首）が収められて居る。後者の制作年は、明らかではないが、天明初年ごろと思われる。

竹枝詞は、文化・文政以後に、その流行が全盛となるが、それでも尚、頼山陽が「猥褻瑣細」と斥け、岡井赤城が「女郎詩」と慢罵し、津坂東陽が「詩道を汚す風雅の罪人」と非難するように、道学者的見地からの否定的評価が多かったのであるから、その意味でも、師栲亭の影響を考えるのは、妥当であると思われる。

菊地五山は、その『五山堂詩話』（六）（文化六年刊）に、「鳥棕軒

の鴨東雜詠二十首は、詩は清婉を極め、継ぐ者は有ると雖ども、竟に其の右に出ずること能はず」と評し、その五首を紹介して居る。

また小畑行簡の『詩山堂詩話』も、八十四首目の作品を、「詞氣平淡、纖細巧況、使二人^{ラシテ}爽然^{タラ}」と評して居るように、とても十九才の人の作とは思われないのも、また事実である。春樵の語に、「奇才子」とか、「京師文妖」とある所以であろう。

今その版本を検するに、二十首本から百二十首本に至る過程は大凡次の通りであろうと考えられている。^①寛政九年に『鴨東雜詠』が発表されるや、既に見たように、その卓拔さから、棕隠の評判は高いものとなったが、しかしその後犯した失行によって悪名を受け、師友との交わりを絶たれ、寛政十三年（二十三才）の四月に江戸に下る破目におちいる。しかしその十一月頃に、恩義ある叔母の危篤のため一旦帰洛する。その後改めて江戸に下り、文化二年から十一年まで（二十七才から三十七才）の十年間にわたり、流寓の日々を送ることとなった。

文化十一年春、彼は京に戻るが、圉りは一部の友人以外は冷たく、彼も病気がちとなる。その病床にあって、旧稿を整理して六十五首本が成った。春樵の序には、「搜^二閱旧稿^一、參訂斟酌、綜為^二六十首^一」とある。またこの書の成るには、平塚瓢齋の尽力によるものが大きかったようでもある。

それはともかく、棕隠はこの書を田能村竹田に贈り、文化十三年に百首本の発表となる。名も『鴨東四時雜詠百首』と改め、竹田の序をつけ、自注の他に瓢齋の増注を補い、（後に示すように）数首

毎に括約して、鴨川の東、即ち祇園の名所、景物、年中行事、風俗、人情などを、細かく、そして活き活きと描写して居る。特に祇園の遊客、酒妓、娼婦の情致、情状の描写に精彩を放っていた。そのため、「輕佻淫靡」の批難はあったであろうが、それはともかくとして、(中国ではいざ知らず)本邦でしつかりした組織と用意の下に、煙華の風流繁昌を謳った竹枝詞は、他に類を見ないと云われて居る。門人の菊池溪琴が、「日東竹枝響、正自「島郎」開」と讃えているのも、また道理であろう。その評判は、堂上人などの上流社会にあっても、高くなって居たようである。

その後も増補は続けられ、文政九年春には、現在最も流布して居る百二十首本の完成を見る。それに付せられた峨嵋山人の序に於て、六十五首から百首本、ひいては百二十首本の増補の経過をおしはかることが出来るが、今は詳説せず、次の機会に再説したい。

ここで参考までに、内容の構成について述べておこう。全詩百十九首、総括一首で、百二十首より成る全容は、十八の部分に別けられて、それぞれ各部に対する作者の説明が、「以上何首、何何を賦す」のように記され、各詩には自注が附されている。因みに、その各部と収容詩数を次に挙げておこう。

- (1—5) 賦鴨水第四橋景致 (6首)
- (6—8) 賦知恩院法会 (3首)
- (9—15) 賦東山諸勝區 (7首)
- (16—18) 賦東山舞妓 (3首)

- (19—22) 賦下諸場鋪之待二遊客一者上 (4首)
- (23—24) 賦祇園廟下通衢及六街諸樓之豪華 (2首)
- (25—31) 賦諸樓譙席及遊客之情致 (7首)
- (32—37) 賦娼婦接客之事狀 (6首)
- (38—48) 專賦酒妓之事狀 (11首)
- (49—63) 賦娼妓身上榮枯進退及雜事 (15首)
- (64—68) 賦祇園社会及前後熱鬧 (5首)
- (69—79) 賦納涼夜遊之光景 (11首)
- (80—87) 賦鴨曲秋景及雜事 (8首)
- (88—92) 賦「秋景」再及「東山葛原之際」 (5首)
- (93—100) 賦祇園街、建仁寺街、宮川街、及戲場左右之景致 (8首)
- (101—107) 賦鴨曲雜事 (7首)
- (108—109) 賦下娼妓有「情實」者上 (6首)
- (114—119) 賦歲(歲)暮之事俗 (6首)
- (120) 總括一首 通計一百二十首

二、吉井勇と『鴨東竹枝』

吉井勇(一八六六—一九六〇)は、新詩社から明星・スバル等を舞台に活躍したが、その初期には海洋に関する歌を作り、やがて旅情をうたって頭角を現わした。しかし後半からは抒情歌人として、恋愛を主題とする秀歌を作るようになり、独自の境地を拓いた。特

に、人生の享樂の世界を詠いながら、独自の頽唐歌風を樹立したことで知られている。

代表歌集には『酒ほがひ』『祇園歌集』等があるが、祇園の情趣を詠いながら、紅燈の巷の風情をきわめ、情痴世界の哀歎を描き出した。その意味では近代の竹枝詞人と云えようが、その彼に、中島棕隠の『鴨東四時雜詠』の雛案訳歌があるのは興味深い。

彼は（自ら隨筆の中で触れている様に）⁽⁸⁾ 泉鏡花の影響をうけて、漢詩にも造詣が深かったようであるが、その彼の最晩年の書に、白井喜之助氏の写真と組み合わせ、自作の短歌と、それをめぐる隨想をつづった『京都歳時記』（昭和三十六年・修道社刊）と云う佳篇があり、その中に「鴨東竹枝」と云う一篇がある。

梅雨しあり、嫌ひながらもひそやかに

鴨東竹枝 読むと知らゆな

の一首で始まるものである。なお昭和五三年に番町書房から刊行された全集の第七巻にも、同じ標題のもと、ほぼ同じ内容の文がある。それによると、彼が手にしていた版本は、文化九年の峨眉山人題の序を付したものであり、彼は再販本であろうと推測して居る。

その内容を、彼は「題が既に語っているように、つまりは『祇園詩集』なのである」とした上で、「私がかういふ祇園を中心にして、鴨東の風物を唱った詩集があることを知ったのは、今からもう三十年近くも前、私が『祇園歌集』といふ小さな歌集を出版した時、その本の装幀を頼んだ竹久夢二君が、同じような詩集があると云つて貸して呉れた時からなのである。」と同書とのかかわりを追懷して

いる。

そして「ひまにまかせて、気まぐれに、その中の目についた詩を、歌に訳して見るようなこともある」として、

白川斜入鴨川流 夜雨殘燈南北樓
多少情人婦不得 翠蘋紅蓼枕辺秋
の一首を

白川の水より寒き夜の雨に

枕も濡れて秋はきにけり

と訳して居る。そして以下同様に、五篇の漢詩を訳出して居る。

さて先述の原詩は、全百二十首の内、八十五番目に置かれた作品であり、「鴨曲の秋景及び雜事を賦す」と分類標記された八首の中の一編である。今それに付された棕隠の自注をたよりながら、先ずその原詩を検討してみよう（訓点は自注により、書き下しと訳は筆者による）。

白川斜^{ニ入リテ}鴨川^一流^ル 夜雨ノ殘燈南北ノ樓
多少ノ情人^{ルコトヲ}婦^レ不得 翠蘋紅蓼枕邊ノ秋

白川斜に鴨川に入りて流る。夜雨の殘燈、南北の樓。多少の情人婦ることを得ず。翠蘋紅蓼、枕辺の秋。

（注）白川は新橋を経て大和橋に到るの間、兩岸に亦た一帯の牆壁欄格（閣）有り。諸樓の後面（面）に属す。」

注から解るように、今日吉井の歌碑の立つ異橋下流のあたりの景物と思われるが、その辺りの色街としての祇園の風情を、秋の夜の雨に託して、巧みに詠い上げている。

試みに拙訳ながら、詩の大意を取ってみると、

白川の流れば、鴨川に斜めに合流して流れて行く。夜の雨の中、消し忘れた燈のほかがゆれて、南北の楼が立ち並んでいる。さだめし何組かの恋人達が帰る事を忘れて、夜の風情を楽しんで居るのであろう。緑の浮き草（翠蘋）のような男と、水辺に生え、葉が非常にからい草（紅蓼）のような女、秋はその彼等の枕辺にも既にしのびよっている。

和歌の方は、原詩の風韻を、「夜の雨に枕もぬれて秋は来にけり」の表現が、よく歌の意を捉えていて、絶妙の翻譯歌であろうと思われる。

以下同様に、本篇所収の他の四篇をみてみよう。もつとも原詩と訳歌における文学的風情の響き合いを鑑賞するのが本筋であろうし、書かずもがなの感もなきにしもあらずであるが、成るべく文献的考察に限りて両者を分析することにとどめて、その文学的鑑賞の如何については、別の機会にゆずりたい。

次いで五十九首目に置かれ、注によれば「娼妓身上の栄枯進退、及び雑事を賦す」と分類標記されたものの一首であるが、

粉黛易_レ消紅易_レ残 每懷_{ニシテ}照子_ヲ座間看

一揮ノ眉掠含_ニ輕潤_一 彷彿_ス芙蓉露未_ル乾_カ

粉黛は消し易く、紅は残り易し。毎に照子を懷にして座間に看る。一揮の眉掠輕潤を含み、彷彿す芙蓉の露の未だ乾かざるを。

おしろいやまゆずみは消えやすいが、紅は残りやすいと云うわけで、よる年波のせいか、化粧は思いのままにならない。そこで何時

も鏡を懷にして、折があれば取り出して見てばかり。一度び化粧具の眉涼を用いて眉をぬぐえば、その表情には一寸とした軽やかな潤いを帯びて、あたかも芙蓉の花におかれた露がしつとりとして未だ乾かないさまをおもわせる。

(注) 娼妓は常に粧具一帛を携ふ。酒席の間、客に侍して猶ほ屢々脂粉を理す。公然として羞避を知らず。曲中の賤習なり。時俗、用ふ所の眉掠は畫眉の具に非るなり。只だ古称に依るのみ。其の製は患毛竹管。蒙茸すること、水墨の筆の如し。婦女粉を施して後、輕く水に蘸し、満面を掠掃す。其の粉は自ら瑩滑し、粘滯して斑を為さしめず。其の管は長さは一寸許り、圍は二寸許りなり。而して携齎して帛裏に在る者は皆銀管を用ゆ。小大は便に隨ふ。其の他、脂盒、脂筆有り。併せて之を三具と謂ふ。皆純銀もて之を製す。雕鏤は美を極む。○本草古鑑釈名に照子有り。また聖恵方に銅照子有り。眉涼は振子なり。本草五倍子の條下烏鬚方に云へらく。眉掠を以て、鬚髮上に刷す、と。

この詩を吉井は

紅粉の褪するをかこつうす化粧

鏡見るだにわびしかりけれ

と訳して居る。女の化粧の衰れさを詠つて、しかもしつとりとした情趣がある。芙蓉の露のたとへの訳出はやや疑問だが、工夫のあとを感じられる。

更に第八十四首（鴨曲の秋景及び雑事を賦す八首の内）にあたる次の詩であるが（因みに、先述した詩山堂詩話が絶讃したものである）、

士女蘭盆送_レ鬼時 相携薄夜傍_二前涯_一

且觀如意峯頭火 大字割_レ雲收_レ焰遲

士女蘭盆鬼を送るの時、相携えて薄夜前涯に傍ふ。且_{シテ}らくは觀る如意峯頭の火、大字雲を割して焰を收むること遅し。

男女が御盆の終りに先祖の霊を送る時にあたつて、つれ立って夕暮れ時に岸辺によりそい、しばらくは如意が岳の頂の火に眺め入る。その大文字の火は雲をたちわつてもえあがり、その焰はなかなか消えないで、夜空にもえ盛っている。まるで二人の心の焰のように。

(注) 七月の既望、都人士女は河の上_{ホトリ}に來り、于蘭盆会の鬼（先祖の霊）を送る。僧徒はまた各々、水陸に道場を設く。此の夜、東北の如意峰に、村人火を挙ぐ。峯面舊より抗穴有り。其の数四百八十餘り。相去ること各々五尺許り。縦横に大の字の様を連ね成す。每晝長百五十間。本日前、山下の村夫、柴を其の穴に積み、期に至つて火を點す。光焰赫烈として、翠微に映帶す。相傳へて云ふ。昔相国寺の僧景三、其の筆意を以て之を作る、と。蓋し亦た招冥の爲にする者なり。

これを吉井は

宵闇ははかなきものか相凭りて

加茂の堤の大文字を見る

と訳して居る。

更に第九十四首（祇園街、建仁寺街、宮川街及び戲場左右の景致を賦した八首の内の一）の一篇であるが

霜老東山凍霧橫 寒鐘半夜暗飛_レ聲

北風不_レ管金闌淚 吹_二落者中_一催_二別情_一

霜老て東山に凍霧横ふ。寒鐘半夜の暗_{ヤミ}に聲を飛ばす。北風管せず金闌の淚。者中に吹落して別れの情を催す。

霜も厚くなり、東山には凍りつくような寒い霧が流れる。寒さを深める鐘が、夜中の闇の中に鐘の音を響かせる。北風は美しい寢室_{ねや}の中で流される涙には一切かわらない。二人の間に吹き落ちて、恋人達にせつない別れの情をひきおこさせる。

(注) 建仁寺は子夜に梵鐘を撞く。一百八聲鴨東の諸街の間に振ふ。大抵樓客の夜遊べるもの、此を聞くを以て限りと爲す。已に歸る者有り、猶宿する者も有り。皆その決する所に任す。此れ本と煩惱滅除の梵音なり。此の間、相偲りて、寵紅嬋翠の定準と爲すは、亦た笑ふ可し。

この詩を、

煩惱の鐘の声消えて風さむく

閨（ネヤ）にもひびく霜の声かな

と訳して居る。この作は更に、同書に収められた『鐘の音』でも取り上げられて居るが、同所には、「ある夜の実感」として、「醉余のすさび」として詠った「京さむし鐘の音さへ氷るやと言ひつつ冷えし酒をすすりぬ」の歌がある。この和歌は亦た隨筆集草珊瑚の六、祇園の風流（全集七卷所収）にも取り上げられて居るが、あわせて鑑賞して見ると、一段と興趣が深いものがある。

さて『鴨東竹枝』には、更にもう一篇の訳詩の試みがのせられて居る。第百十七首（歳暮の事俗を賦す六首の内の一）で、次のような詩である。

祇園廟畔送窮情 祈賽都人紛達明

似遺二年多少悶 伴嘲伴罵闌聲行

祇園の廟の畔、窮を送るの情。祈賽の都人紛として明に達す。一年の多少の悶を遺るに似たり。伴嘲伴罵、聲を闌はして行く。

祇園神社のあたりは、おしつまった年の瀬を送る雰囲気盛り上がっている。御参りの都人はごったがえして、明け方にまで達してしまふ。まるでこの一年間のさまざまな憂い、苦しみを忘れようとしているようである。わざとらしく嘲けり、わざとらしく罵り合いながら、大聲をかけ合い、ふざけあいながら歩いて行く。

(注) 除夜の都人は皆祇園に詣で、廟燈に就いて新火を取る。歸途にはおのおの火縄一條を手につく。俗の例(ならわし)に、之を以て歳朝の熈炊に備ふ。此れ則ち燧を鑽り、火を改むるの意なり。且つ雜還往還の間、彼是(かしこにここ)に大聲壯語し、口を極めて嘲罵す。然れども泊然として相ひ過ぎ、敢へて之を尤めず。古俗今に至りて、何の謂なるかを知らず。

これを吉井は

おけら火を守りてかえる元朝の

曉闇にいて何をのしる

と訳して居る。

注から見てもわかる様に、祇園八阪神社で新年の朝に行なわれる、削掛神事(所謂をけら祭)の様を詠ったものであるが、吉井は更に『京都歳時記』所収の、「をけら祭」と題した別の隨筆で、やはり棕隠の『鴨東四時雜詞』に触れ、をけら祭の情景を実に巧みに詠ったものとして、この百十七首とともに百十九首(戸迎新新景催／

草繩千尺絡檐廻／不消月令殊鑽燧／頒取社頭燈火一來。の二篇をあげ、訳としてではなく、ただ「棕隠に倣つて次のやうな歌を作つた」として、次の二首をのせて居る。

おもしろきをけら詣の人なだれ

火縄振り振りゆけば樂しも

闇ふかきおけら祭の夜の街

人のひとりも火持たぬはなし

ただしこれはあくまでも訳詩ではないと考えられる。しかし、次にふれる句題和歌の一つとして考えれば、それなりに興趣が感じられるであらう。百十七首の面白さは、注で「古俗今に至りて、何の謂なるかを知らず」と棕隠が指摘した所の、往來で行き交う人々の悪口の云い合いであらうが、訳詩の方では吉井はその点をしっかりと捉えていると思われる。

三、漢詩と和歌とのかかわり(句題和歌を中心に)

さて、以上見てきたやうな吉井の文学的営為は、日本におけるどのような文化的構造の延長上に理解されるべきものであらうか。ひいてはそれを通じて、日本文化における、漢詩を中心とした漢文教養のあり方も展望してみたい。

漢詩の和訳としてよく知られ、また愛読されているものに、井伏鱒二の『厄除け詩集』がある。『唐詩選』などから選ばれた十七首の詩を、独特の輕妙洒脱な口ぶりで和訳したものであるが、これが父親ゆずりのものであるのみならず、文人趣味が俗に流れて漢文戯

作が盛行し、漢詩を日本語で俗謡調に訳す試みが流行して居た十八世紀後半の知的遊戯の流れに立つものでもあることは、すでに土屋泰男氏^⑩が、この訳業が十八世紀後半の美濃派の俳人中島魚坊（潜魚庵・一七二五—一七九三）の、『唐絶和訓』との関連があることに深い考察を加えられた上で、その伝統性と、更に彼における近代性の別出をも試みて居られる。

ただその際に、土屋氏が引用された大岡信が、その『折々の歌』の中で指摘する様に、「井伏の資質が短歌的ではなく、俳句的であり、そのリズムの形式にも、七五調ではありながら、七七・七五・七五の形式が好んで用いられ、そこに一見平安期今様歌謡的な古風さが現われつつも、そこに井伏独特の個人的逸脱を楽しむ要素が加わることによって、全体の印象は明るい近代性を獲得して居る」所に、井伏の訳詩の本質があるように理解され、また評価もされてきている。

とにあれ、これは訳詩の形で翻案しつつ、江戸期文人趣味の流れに立つ営為であると理解されようが、吉井は漢詩を和歌の形に訳したものである。そしてそこには、平安貴族の趣味空間に展開した「句題和歌」の流れに立つ、江戸文化の一側面を考えてみなければならぬものがあると思われる。

「句題和歌」とは、〈句題〉即ち漢詩の句を題として、和歌を詠ずることである。

例えば『古今集』（和歌上）にある大江千里の
月みればちぢにものこそかなしけれ

わが身ひとつの秋にはあらねど
が、江戸時代以来多くの注釈家が一致して説くように、実は漢詩を下敷とした、一種の翻案であるとして理解されて居るようなものである。

即ちこの歌は、白楽天（白居易）の

満窓明月満簾霜 被冷燈殘拂臥床

燕子樓中霜月夜 秋來只為一人長

満窓の明月、満簾の霜／被は冷やかに燈は残し、臥床を払う／燕子樓中、霜月の夜／秋來只だ一人の為に長し。

この詩はその長文の序によれば、白楽天が若いころ世話になった徐州の節度使張愔の愛人阿瞞が、張愔の死後も操を守って居ることを聞いて感動して詠じたものであるが、この後半二句をもとにして和歌を詠じたものが、先の大江千里の歌であるとされている。

所で古今集の同じ巻には、読み人知らずではあるが、似た趣きのある歌がみられる。

わがためにくる秋にしもあらなくに

虫の音きけばまづぞ悲しき

金子彦二郎博士は、『平安時代文学と白氏文学』に於て、この歌もやはり前記の詩の同じ二句にもとづくものとされて居るが、更にこの二句は和漢朗詠集にも採録されて居り、摘句の形で広く親しまれて居た事が推測されてもいる。

大江の家は代々漢学者の家柄であり、千里が漢詩と和歌の接点とも云うべき句題歌に、才能を発揮した事情もまたその上に理解され

る。因みに彼の歌集『大江千里集』は、そのほとんどが句題の歌でもある。

もつとも古今集や後撰和歌集などでは、千里の歌を取り上げながら（古今集に十首・後撰集は三首）も、いづれも題の詩句を削り、読み人知らずとして居る。

これには、先程の金子博士が、九世紀の弘仁期（嵯峨天皇）の頃は漢詩文が尊重され、勅撰の漢詩集である『凌雲新集』、『文華秀麗集』が、また淳和天皇の時の『経国集』などが作られて居るが、十世紀に入ると、醍醐天皇の御代には、和歌として最初の勅撰集古今集が作られて居るし、更に九世紀末の八九四年に遣唐使が、その三百年の歴史を閉じたことによる文化の国風化が進んだ事情が留意されなければならぬことを指摘されている。

この間の事情、特に九世紀における句題和歌の流行については、村上哲見氏の『漢詩と日本人』^{〔註〕}にすでに詳細な分析があるので、ここではこれ以上の言及は加えないでおく。

漢詩と和歌との関連については、句題和歌の他にも、新撰万葉集に見られるように、和歌の一首をテーマにして七言絶句に詠じるものや、和漢朗詠集に見られるように、詩句と和歌をさまざまなテーマ毎に並列したものなどがある。

新撰万葉集は、（成立や伝来は不確実だが）上下二巻から成り、元禄九年（一六九六）刊本によれば、上巻には寛平五年（八九三）、下巻には延喜十三年（九一三）の序があり、上巻に百十九首、下巻には百三十四首の歌がそれぞれ収められて居るが、その内の一首以

外は、全ての歌に七言絶句の漢詩を附して居る。即ち和歌を漢詩に翻案して居る点で、他に類を見ないものである。

今その例を一つあげてみれば、紀貫之の

夏の夜の臥すかとすれば郭公^{ホトトギス}

鳴く一こゑにあくるしのめを

日長夜短嬾晨興 夏漏遅明聴郭公

嘯取詞人儉走筆 文章気味興春同

日は長く夜は短く晨に興くるに嬾うし／夏漏遅明に郭公を聴く／嘯取す詞人の儉^{ひそ}かに筆を走らすを／文章の気味は春と同じ。

としているが、句題和歌は、既に見たように、三十一文字の和歌に對して、七言二句がよくつり合っていたのに對して、この和漢朗詠集のように七言四句を對するのはややつり合っていないように思われる。即ち二句はどうもつけたりの観が多くて、文学作品としての完成度がやや劣るとの評価が一般的であり、和歌の発想を借りて漢詩を作るのは容易なことではないと思われる。イメージ構造のちがいを考えざるをえないし、更には言語としての表現構造の違いもあり、このような試みが困難である事をも思わせるものがあるようである。それにもかかわらず、日本の知識人達は、何とかその障壁を乗り越えようとして来た。それはある意味で、日本文化の歴史的宿命とも云えるであろう。

和漢朗詠集は前記の二書よりも百二十年程後の書であるが、前二書とは大きく異なるものである。即ちテーマは共通であるが、本来独立した作品を並列した点に特色があるのである。収める作品は、

漢詩が和漢双方で五百八十八首、和歌二百十六首にのぼるが、それらをさまざまなテーマ毎に分類してある。

例えば、下巻雑の巻の「山中の侘びずまい」の類に、

遺愛寺鐘歌^レ枕聴 香炉峰雪撥簾看

の白楽天の詩をあげ、それに対して、源宗于^{むねゆき}朝臣の

山里は冬ぞさびしさまさりける

人目も草もかれぬと思へば

が並ぶが、それぞれ独自に詠じられたものであり、これまで見て来たような句題和歌などとは、本質的に異なるものであろう。

書名に見られるように、朗詠の風潮が流行する中で編まれた秀句選であるが、更にその成立の事情としては、川口久雄氏が『平安期日本漢文学史の研究』^[1]の中で指摘された様に、「詩学入門の教科書」的役割が求められて居た事もあるとともに、村上氏が指摘されるように、漢文的教養の広汎な浸透と、日本人が元来短詩形を好む点も考慮しなければならぬであろう。

ともかくも、平安期の漢文的教養を土台として、このような独特な文学の様相が展開したのだが、このような教養の構造は、更に近世においては、次のような展開を示すことになる。

江戸時代の文化・教養と、漢文教養との交叉には、戯作を始めとして、多くの文学的営為が、さまざまな相と次元において展開されて居るが、例えば、江戸時代における韻文学の新しい動きにも、漢詩との深いかかわりが認められる。

まず、俳諧の世界では、芭蕉の作品に漢詩の影響が見られるのは、

すでによく知られて居る。蕪村も、文人画の作家としては、漢文教養として受容した中国的教養の影響は明らかであるが、その俳句においても、その底辺には漢詩への傾倒が見られるのも、また知られて居ることである。のみならず、句題和歌のように、漢詩の句を題にかかげて詠まれた句も登場した。蕪村からその例をあげれば、杜甫の五言古詩の「房兵曹が胡馬」の一句「風入馬蹄輕」を題として、「木の下が 蹄のかぜや 散るさくら」と詠んで居る。このような試みが、やがて、あの「春風馬堤曲」のような俳詩へと展開して行くのであろう。

川柳でも、当時の唐詩選の流行と普及を手がかりに、漢詩をふまえたものが見られるようになる。例えば、張継の「楓橋夜泊」をもとにして、「月落烏啼て女房はらを立^{たち}」のようなものである。

風流を解する知識人達の、色街における文学的営為の一つに都々逸があるが、その際にも七七五の句型の中に、気のきいた数句をはさむ手法が発達する中で、そのような句としては、唐詩を用いることが多く見られるようになった。例えば白楽天の長恨歌の二句をはさんで「待てど来ぬ夜は唯まじく」と 夕殿螢飛んで 思い悄然たり 秋燈 挑げ尽して 未だ眠ること能わず 鶏の鳴まで寐もやらず」のようなものであり、明治の初めにかけて大変流行したようである。

さてこのように、江戸時代の諸相を考える上で、遊里という遊びの空間での展開が、興味あるものをもたらしているが、この事は棕隠や勇の世界につながる流れでもあろう。

まさに菊地五山が云ったように、継ぐ者のなかった竹枝詞人棕隠の詩を、句題歌の限界を（すでに見たように）超えながら、受け継いだのが、吉井勇の訳の営為であったと云えるのではなからうか。

以上、日本的教養が、漢詩に対する造詣を中心とした漢文学とのかわりの上に形成されることの一例を、中島棕隠と吉井勇との文学的営為のかかわりを手がかりとして考えて来たが、またそれは、更に日本文化の流れの上に於ても、句題歌などの顕著な流れの伝統に倅さすものでもあることを、展望する事が出来るものでもあった。

まさに日本文化の中で展開した独自の解釈学であり、日本の古典学としても機能して来た漢文学の実像を推し測る事の出来る試みでもあったと云えよう。その視点の上に、日本文化の知的構造を解明する事を目指す議論への、一つの試みを行なった次第である。これを出発点として、今後日本文化の諸相において、漢文学をベースにした日本的教養の形成の姿を解明する営みをすすめたいと思う。

（注）

- （1）表紙見返しなどから、『鴨東四時詞』が正式名称と考えられて居るが、竹枝体の詩により成って居るので、『鴨東竹枝』の名を以て呼ぶ事が世間に通称としてあったのは、棕隠の友人梅辻春樵の書いた序文に、『鴨東竹枝序』とある事からも肯ける（もつとも、後述する65首本の序では『鴨東四時序』とある）。

- （2）劉禹錫（七七二―八四二）。唐の中山（河北省）の人。一説に江

蘇省とも。字は夢得。監察御史となったが、王叔文の政治改革に与ったため、叔文失脚にともない、朗州に流された。後に各州の刺史を経て太子賓客となり、檢校礼部尚書を兼ねた。五言詩に長じ、晩年白楽天と親しく、二人で唱和した『劉白唱和集』がある。竹枝詞体の開祖としても知られるが、才をたのんで世と合わず、文章によって自適したと云われている。

- （3）村瀬栲亭（一七四六―一八一八）。京都で活躍した儒学者。古注系の学問で知られる。皆川淇園らと並び称された。詩文にも長じ、書画もよくした。一時秋田藩に仕え、明道館の設立に尽した。

- （4）六如（一七三七―一八〇一）。近江の人で慈周が名。六如はその字である。唐詩流行の中にあつて、宋詩による詩風革新に勉めた。

- （5）岡井赤城（？―一八〇三）。讃岐の人。名は鼎。赤城は号。古文辞学を宗とし、詩文にも長じた。高松藩に仕えた。

- （6）津坂東陽（一七五六―一八二五）。伊勢の津の人。名は考^{たかひろ}綽。東陽は号。古学派。津藩に仕えた。

- （7）諸版本の校定については、すでに野間光辰氏の精密なものが、中島棕隠集（上方藝文叢刊六）の解題にある。

- （8）全集（番町書房刊・昭和五十三年五月十日）七卷所収の隨筆に、鏡花とのかかわりを述べるものが多く見られるが、例えば洛北隨筆中の「鏡花先生を追憶」の他、鏡花と漢詩としては、相聞居隨筆中の「李長吉」などがある。

- （9）昭和五十二年筑摩書房刊。

- （10）大修館『漢文教室』一七七号所収（一九九四年二月）。

- （11）金子彦二郎『句題和歌・千載和歌研究篇』（昭和十八年十二月・培風館）の第二篇「句題和歌（大江千里集）の研究」に、千里以前と千里の句題和歌について、更にさまざまな句題の校勘などが

詳しく論究されている。

(12) 父の音人^{オトナリ}を始め、甥の大江維時、その子孫の匡衡・匡房など、一族には著名な学者が多い。

(13) 『漢詩と日本人』村上哲見（講談社選書メチエ）（講談社。一九九四年二月一〇日）

(14) 『平安期漢文学史の研究』川口久雄（明治書院・昭和三十四年九月三十日）